



巻 頭 言

科学技術への理解と信頼

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
社団法人 全国農業改良普及協会 会長

田口 俊郎

今、二十一世紀への明るい展望を切りひらいていくため、各方面で積極的な改革に取り組んでいる状況にあるが、それは国際的にも国内的にも大きな転機にあることを意味している。そしてそれらの課題に共通してみられることは、長年にわたって経済社会の各種領域や分野（間）に構築され、運用されてきたシステムの相互間の円滑な連けいや流通に齟齬や矛盾を生じ、それが顕在化してきていることによるものが多いように思う。しかもそれがしばしば大きな問題となることが見受けられる。また予め予測される場合には、例えば現在世界中のあらゆる関係部所で行っている「いわゆる2000年問題」のように十分な手立てを講ずることも可能である。しかしその場合でも予期しない事が起ると大変な問題になってしまう恐れから、念には念を入れた対処の仕方が提案されている。今回の東海村の原子力関係施設の事故は、経緯を見ると、農林水産分野の係わりも含め種々の課題を残しているように思う。かつて経験したことであるが、放射線照射によるじゃがいもの発芽抑制が効果的で安全な技術として開発されたので、普及させようとしたが、消費者感覚にマッチしなかったことから実用化はしなかった。それは、科学的に安全であることを理解したうえに、なお放射線が照射されているいもは「でもないや」という選択であった。

また今日の話題として遺伝子組換え技術利用による大豆等がある。このバイオテクノロジーは、様々な可能性が見込まれる技術手法として注目されているが、その科学的理解は、国民の中にどれだけ浸透しているといえるだろうか。

今は亡き育種の大御所が、かつて云われたことが思い起される。それは、従来型育種とバイオテクノロジー育種の手法を比較して、育成された作物品種の特性は、「前者は円やかに現れるが、後者はシャープに現れる」ということであった。正に解りやすい説明で、いずれを利用するかは、十分的確な理解のうえに利用する人々の選択の問題になるように思う。いずれにしてもこれら諸問題をめぐる各搬の批判や見解を通じて、見受けられる基本的課題は次のように思われる。

その第一は、科学的に十分な情報が責任をもって提供され、信頼され、的確な理解が得られる条件が整備されていることである。ときにはネガティブデータやほとんど未知の事象についても出来るだけの情報を公開することが、関係者間の信頼を増すことに通ずると思う。それはこれまでには、情報流通が不十分なため誤解を生じたり、ときには提供側と利用側の信頼が壊われ、逆に不信感を助長してきた場合も少くないと思う。第二には、科学技術－経済－社会を通ずる各種システム間の整合性を折々に修復、是正していくことである。その基本は、人々の科学技術への的確な理解が進むことやそのための啓発等必要な対応を構ずること等である。第三には、科学技術にもときには限界があることも教育や利用の場では周知すべきことと思う。勿論これらは、科学技術の進歩によって越えられることがあることから時間と客観的実態が動くことは当然である。以上科学技術への理解が、深まり、拡がることを願って所感を申上げる次第であります。